

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話：044-988-0004 (柿生中学校)
 http://www.kakio-kyodo.com
 第58号

「塚」を訪ねて(3)

王禅寺東の「牛塚」を考える(2)

麻生と牛との密接な関係とは

麻生は鎌倉時代には北条一族の甘縄時頭領の領地でした。文献で「麻生」という地名が現れたのは南北朝時代初期で、その当時は没官領(モツカンリョウ=北条氏から没収した領地)として足利尊氏が治めていました。やがて麻生郷の本郷(現在の上麻生国領と考えられる=国の役所が管理している領地=国衙領)と堀内(ホリノウチ=本郷と地続きの地域で中世では武士の館、古代では国司の館で周りに堀を巡らせたことから付けられた地名と思われる)は鎌倉の保寧寺(ホネヅ=足利氏の祈願寺)に寄進されています。

右の史料A(岡本家文書)は14世紀の麻生の姿を示すもので『麻生郷内の本郷・堀内は乳牛役(牛を飼って牛乳から「蘇」(ソ)は牛乳を煮詰めチーズ状にしたもので薬としても使われた)を作り献上する役)を受けているので、以前からの決まりでこの郷は税などが免除されているということを知りておいてもらいたい。(新たに税などを課さないように)武蔵国守護代(守護は地方の政治や軍事を受け持つ役職、守護代は守護の代わりに派遣される役職)の薬師寺公義(ヤクジキョウ)が將軍の命令を受けて保寧寺の長老に申し渡す』という内容と思われます。この手紙からは南北朝時代初期には麻生郷の中の一部では牧牛が行われ、牛乳から「蘇」を作る酪農がおこなわれていたということが判ります。あるいは、この当時まだ酪農がおこなわれていなかったとしても過去において麻生では朝廷に蘇を

貢納していたものとしていたものと考えられます。

平安時代に著された延喜式(律令の施行細則集)を見ると武蔵の国には4か所の「牧(マキ=牛馬を放し飼いする牧場)があり、麻生に隣接する「石川牧(現在の横浜市青葉区元石川町周辺か)」がありました。さらに資料Bを見ますと平安時代初期には東日本では酪農が盛んに行われ、石川牧でも牧牛が行われ「蘇」が貢租(税)として朝廷に納められていたということが推測できます。また資料C(8世紀初頭の大宝令と10世紀の延喜式をもとに作成)を見ますと古代の関東地方では勅旨牧(朝廷が管理する牧場)が多くみられ、馬だけではなく牛の飼育もかなり盛んに行われていたことが推測できます。しかし鎌倉時代以降の関東地方は武士の台頭により牛より軍事的な馬の飼育が中心となり、牛の飼育は減少し朝廷への貢納も少なくなります。ただし麻生では比較的后まで牧牛が残っていたのではないかと考えられます。それは史料Aを見てもまだ乳牛役という文言が使われていることから考えられることです。

以上の資料で麻生では古くから牧牛が行われ蘇などの乳製品を作る酪農の存在が見えてきます。麻生に牛塚があるということはこのような背景があったものと思われます。

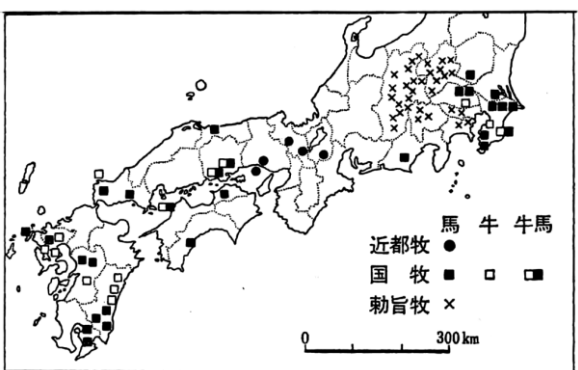
参考文献：「国史大系」、「南北朝遺文」、「横浜緑区史」、「三浦古文化」、「保寧寺跡-第2次調査-」、「日本の馬と牛」
 (文：板倉)

保寧寺領武蔵國麻生郷内本郷堀内乳牛役事、諸御公事御免之間、不致沙汰之條、所見分明之間、任先例令閣之由候也。
 仍執達如件。
 康永四年二月十日
 保寧寺長老
 薬師寺
 橋(花押)

A：足利氏が保寧寺に宛てた南北朝時代の古文書

国 別	貢租量
関東地方	武蔵 17 壺
	相模 16
	上総 17
	下総 20
	安房 11
	上野 13
	下野 14
中部地方	常陸 20
	伊豆 8
	駿河 12
	遠江 14
	甲斐 11
	信濃 13
	美濃 17
	三河 14
	尾張 15
	加賀 15
越前 15	
近畿地方	若狭 9
	伊勢 18
	近江 17
伊賀 8	

B：平安時代初期の「蘇」の貢納=延喜式より



C：古代の勅旨牧の分布

シリーズ 「麻生の歴史を探る」 第28話

稲毛三郎 ～その城～

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

生田緑地公園、民家園に隣接して枳形城址公園があるのをご存じと思います。この辺はその昔飯室谷戸と呼ぶ低地で、“おし沼”(鍛冶の部落)の名が今も残りますが、枳形城址とされる場所は海拔83.9m。頂上は2500㎡程の面積を持つ方形で枳形と呼ばれる所以ですが、今はエレベーター付きの展望台が設置され、峻嶒な谷々を眼下にその展望は多摩川を越え、関八州を睥睨するといつてよい眺望の地です。

橘樹・都筑の多摩丘陵を領した重成は天然の山塊を利用して小澤・枳形・作延・井田・加瀬の城壘を構築していきます。しかし鎌倉時代のこと、城といってもその機能は政治の中心的なものではなく、多摩川に臨む急崖を利用したの砦のようなものだったと思われますが、関八州から鎌倉を守る軍事的な価値は大きかったのではないのでしょうか。

鎌倉時代これらの城壘は実戦には利用されていません。そこで武蔵風土記で各城の項を調べてみますと、枳形城については「土人の説に稲毛三郎が城跡と云う」と記し、「武田信玄小田原乱入の際、横山某が壘を築く」と述べています。小澤城については「小澤小太郎(重成の子)の居城なりと云う」と記しながらも北条・上杉合戦の城壘であったことを紹介しています。作延城(現在赤城神社・延命寺付近)については「相伝う稲毛三郎が壘とするも証あるものにあらず」と記しながらも、「この地に必謡の祝歌あり、稲毛三郎の妻が鎌倉より嫁せし時・・・」と述べています。井田城(現中原養護学校付近)については旧跡古城址の欄に「五町四方の間に形跡残り、されど何人の居城なりしことを知らず」としており、加瀬城については「往昔太田道灌この地に城を築こうとしたところ・・・」が述べられ重成の名はありません。いずれにしろこれらの城が世に出るのは室町時代末期以降ですが、武蔵国風土記では伝承の域を出ずに扱われています。

それでは治承5年(1181)頃稲毛郡を領したと推定される稲毛三郎はどこに本拠を置いていたのでしょうか。生田枳形山麓の広福寺境内とするのが定説のようですがそれは後年のことで、武蔵風土記稿下小田中中村の項に「旧跡殿屋敷あり、4～5段歩なり、又、花島とも云えり、古え稲毛三郎の居し所という」とあります。小田中は鎌倉街道中の道が通る交通至便の地で、将軍頼朝の義兄弟として、執権北条時政の娘婿として幕府に権勢をふるった重成の居住地としては格好のところがなかったかもしれません。

その重成に影がさし始めたのは、建久6年(1195)最愛の妻綾子(仮称)を亡くしてからで、その死を悼んだ重成は剃髪して稲毛入道と名乗り、前記枳形の山麓に居を移してしまいます。その際、妻の供養に建立したのが現菅北浦の法泉寺で重成山極楽寺とも呼び、頼朝夫妻もここを訪れたと伝承されています。獅子舞で知られる菅の薬師堂はその別当神を祀ったものといわれています。

建久7年(1196)仏教に帰依した重成にまたもや影がさします。それは妻の供養にと相模川に架けた橋の落慶からの帰りに将軍頼朝が落馬、それがもとで命を落としてしまいます。頼朝の死は重成の運命を大きく変えていきます。

参考文献:「新編武蔵風土記稿」、「吾妻鏡」、「川崎市史」、「読める年表日本史(自由国民社)」



枳形門



展望台

養蚕秘話2題

実物ミニ歴史資料展 関連記事

～～日本の養蚕業の歴史的発展を支えたものは～～

蚕当計・乾湿計の発明とシーボルト

柿生は幕末期から明治・大正・昭和にかけて養蚕地帯として飛躍的な発展を遂げ、大正10年には養蚕戸数480戸で生産高は都筑郡の最高を記録しました。まさに近代の柿生・岡上の人々を支えたのは養蚕であったといっても過言ではないでしょう。

日本の養蚕業は古くは弥生時代のころから行われていたということが「魏志倭人伝」にも書かれています。江戸時代には幕府や諸藩の財政立て直しのため養蚕業が奨励され、増産のためいかに養蚕技術を上させるかということが課題となり、蚕種(蚕の卵)業者が中心となって多くの改良が試みられるようになりました。

享和2年(1802)、但馬の国(兵庫県)の上垣守国(ウエガキモリクニ)は気候や湿度管理などについて詳細に書き記した『養蚕秘録』を著しました。さらに岩代の国(福島県)の中村善右衛門(写真右上)は当時長崎にいたドイツ人シーボルトの体温計にヒントを得て、苦心の末ガラス管に水銀を入れて養蚕用の寒暖計『蚕当計(サントウケイ)』を作り上げ、さらに養蚕上の温度に関する精密なデータを作り、その結果をまとめた『蚕当計秘訣』を著し嘉永2年(1849)全国で販売しました。

一方信濃の国(長野県)の清水金左衛門(写真右下)は、養蚕にとってもう一つの関門である湿度の測定用に『乾湿計』を明治6年(1873)に完成させ、『養蚕教弘禄』を著して温度・湿度管理の重要性と具体的な養蚕管理技術を広く全国に伝えました。このように江戸時代後半以降、養蚕に関する技術指導書がたくさん出版され、さらに蚕当計や乾湿計の発明も相まって幕末から明治時代にかけて生糸の生産は飛躍的に伸び、養蚕農家を大いに潤しました。またこれらの技術書は各国語に翻訳されてヨーロッパ諸国にも伝えられ、技術的、生産的にも大きな影響をもたらし、日本の技術が世界に広められました。

なお養蚕業は主に女性の手によって行われることが多く、各農家とも女性の経済的優位が生まれたようです。養蚕の盛んな群馬県の「かかあ殿下」などはその辺りの裏の事情があるようです。さて柿生・岡上はいかがだったのでしょうか。



～～フランスの養蚕業を救ったのは何と!～～

とくがわいえもち

14代将軍 徳川家茂とナポレオン三世の友情

1860年頃ヨーロッパの絹の産地であるフランス・イタリアでは「ノゼマ」という微粒子病によって蚕が壊滅状態になりました。これに対して徳川家茂はフランス皇帝ナポレオン三世に蚕紙(蚕の卵が産みつけられている紙)を3万枚寄贈しました。フランスの世界的細菌学者パストゥール(乳酸菌・コレラ菌の発見者)はこの蚕紙の一部を皇帝より研究用に貰い受け、ファーブル(フランスの昆虫学者で「昆虫記」などを刊行した)の助言を得ながらこの日本の蚕を研究して病気の原因を突き止めるとともに、品種改良に成功して病原菌に強い蚕を作り出すことに成功しました。

家茂の心遣いに感動した皇帝は、お礼にアラビア種の馬26頭を贈ってきました。残念ながらこの馬は戊辰戦争で行方不明となってしまいました。



徳川家茂像

文化財調査情報

第5期 日光台遺跡
発掘調査開始

現在、麻生区上麻生五丁目の尻手黒川道路に沿う場所
で日光台遺跡の第5期発掘調査が行われています。
縄文時代と平安時代の住居跡を中心に調査が進めら
れており、可能であれば後日柿生郷土史料館カルチャ
ーセミナーで見学会と遺跡調査に関する報告講演会を
行いたいと考えています。



≡≡≡ 柿生郷土史料館開館日のご案内 ≡≡≡≡≡≡≡≡

◎開館日：奇数月は日曜日、偶数月は土曜日

3月 3・10・17・24日(毎日曜日) 24日：第39回カルチャーセミナー

4月 6・13・20・27日(毎土曜日) 27日：第40回カルチャーセミナー(予定)

◎開館時間：午前10時～午後3時

≡≡≡ 柿生郷土史料館3～4月の催物のご案内 ≡≡≡≡≡≡≡

第2回 ミニ実物歴史資料展

さんとうけい

「『香当計(養香用の温度計)』とシーボルト」

- ・ 幕末、養香業にとって画期的な発明が『香当計』でした。この発明のヒントがシーボルトの体温計でした。公開されるものは、温度計にさらに湿度計が装備された幕末から明治期のものと思われます。
- ・ 当時の養香の秘伝書である「養香秘録」と、フランス語に翻訳された養香秘録も展示いたします。広くヨーロッパでも読まれた日本の養香技術とは…そこには隠された真実が!
- ・ 公開日：3月3・10・17・24日(日曜日)
4月6・13・20・27日(土曜日)

第39回 カルチャーセミナー

「中世の柿生・岡上 ～戦国時代～」

- ・ 講師：中西望介氏(戦国歴史研究会会員・元川崎市文化財調査員)
- ・ 日時：平成25年3月24日(日)午後1時30分～3時30分
- ・ 内容：*中世末期、柿生・岡上はいったいどんな様子だったのか。
*後北条氏との関係、地域の有力者小島佐渡守の立場は、小島家所蔵の豊臣秀吉朱印状とは何を意味するのか?その謎を解き明かす。